

応用物理学会春季学術講演会

応用物理、かく語りき

公益社団法人応用物理学会主催、2014年度第61回応用物理学会春季学術講演会が3月17日から20日にかけて相模原キャンパスで行われた。春季は毎回関東地方で行われ、本学では今回で5回目の開催となる。



学会運営本部にて、本学学生と写る益教授

応用物理学会は2万人だ。学問分野としては物理学を超える会員が所属する学、材料科学、電工学等、数少ない大規模学会の一つ。理工学系の幅広い分野を扱

は100人を超える本学学生のバイトも意欲的で、円滑に進行できた。澤邊教授は顔を綻ばせた。

研究者は研究内容を発表、または論文によって世に問う手段を持つ。学会はその発表の場である。「学会とは出資者である会員にサービスを提供する場」だと話すのは本部運営委員長である東京工業大学の益哉教授。「応用物理学会は学術的にも社会的にも有効活用できる新しい研究を扱うのが特徴。産業界が多数参加する言わばプロの集う学会は、自分から発信する第一歩、若手の登竜門でもある」と話すと同時に、「若者には気合が足りない」と苦言を呈す。「結論の断言ができません、議論から臆病にな

う。今回の講演会は、学術講演、展示会、懇親会などで構成されている。講演会では4000件を超える発表があり、18の大きな学問分野で活発な議論が行われた。講演会には、本学を含めた学生も多数参加した。現地実行委員長である本学電気電子工学科の澤邊厚仁教授は学会について「プロの研究者が意見をぶつけ合うディスカッションの場」と説明する。「研究のベースとなる学会は学問をする場所であると同時に、新発見を巡る戦いの場。真摯な討論を通じて研究者はエンカレッジされる」。運営の面

なっている。主張しなければ誰も話は聞かない。真理の前では平等、主張するチャンスは至る所にある」。一方で益教授は、若者の新しい発想には期待しているとも話す。「圧迫的な質問も、どう反応するかを試している。最近は大遠距離での議論も可能だが、その場で対面することで初めてその人の本質、論文の背景が見えてくるもの。講演だけではなく懇親会のような与えられたチャンスを活かし、議論に参加してほしい」と、経験と勘に長けた一枚上手の年長者として、若者へメッセージを送った。



青山学院大学新聞

発行
青山学院大学
新聞編集委員会
(学友会直属団体)
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学7号館230号室
TEL・FAX03(3498)4847
毎月15日発行(2月・8月休刊)